

特集記事 「磐座学視点からの三輪山信仰」

藤原 定明

平成3年6月19日、私は山中で偶然に木の碑を発見しました。その碑には、

「巻向山 松原都谷聖跡

三種神器奉祀跡

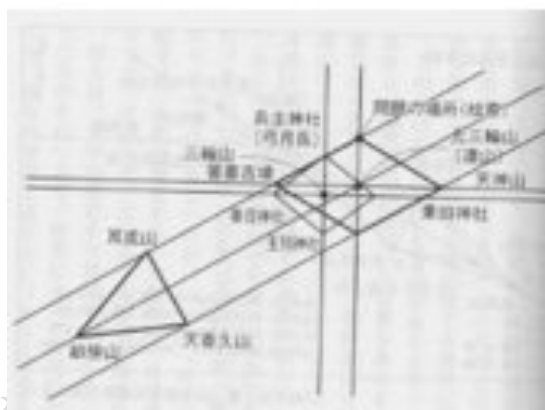
大兵主神社宮司 中 由雄」

と書かれていました。

私はこの伝承とその場所へご案内くださった恩師、野崎香代子先生とが関係しているのではないかと思ひ木の碑の伝承の真実を求めて古代の世界へ足を踏み入れ、イワクラ(磐座)学会ともご縁をいただいたのです。

紙面の都合で詳しい説明は紹介の書籍「甦った神々」をご参照いただきたいと思います。木の碑のあった場所と三輪山、さらには大和三山との対応関係を示したの

図 1



が図1です。

この図は、三輪山を中心とする

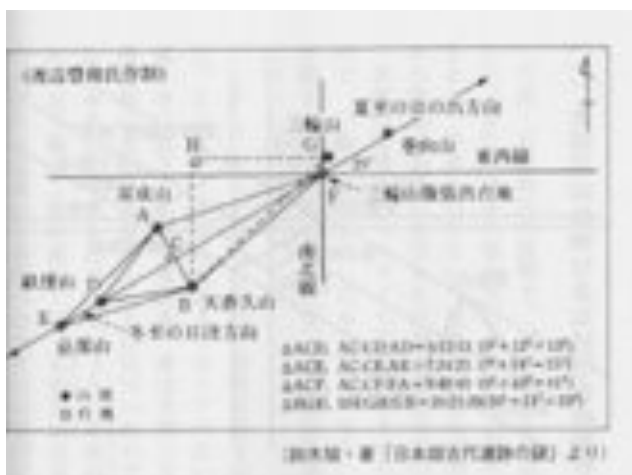
ダイヤ形と大神神社の三つ鳥居のなぞを解明し、古代の祭祀形態を明らかにされた小川光三氏や三輪山の元になっている元三輪山を発見された地元の研究家榮長増文氏、さらには、三輪山と大和三山との対応関係に注目された本学会の渡辺会長のご研究の成果によるものです。

さらに、ペトログラフ学や「記紀」以外の日本の古史古伝の一つ「竹内文書」によって二つのダイヤ形の頂点、つまり元三輪山の北の祭祀場(木の碑のあった場所)が今の伊勢神宮(内宮、外宮)が元あった場所で、「世界が一つの宗教と言葉で結ばれていて、世界を自由に移動していた時代」の世界政府であり、中心であったことが

判明しました。

そこで、この祭祀の形態、とりわけ元三輪山を中心とするダイヤ形と大和三山の対応関係についてご説明したいと思います。

図 2



インと平行になつています。

渡辺会長が示された大和三山で作る三角形の中線、つまり畝傍山から三輪山方向へのラインは、三輪山でなく元三輪山に対応しているのです。さらに、このラインは元三輪山の北の祭祀場(木の碑が立てられていた問題の場所)と耳成山、天神山と天香久山と結ぶラ

この北東から南西へのそれぞれの聖なるラインは、北東地点から太陽を観測すると、冬至の日に太陽が沈むのが、逆に南西地点から観測すると夏至の日に太陽が昇るのが北東地点になるのです。

ところで、元三輪山には「ダンノダイラ」と呼ばれるところがあり、このダンノダイラは天壇の事ではないかと榮長氏は言われています。そして、実際に天壇と思しき遺跡も発見されています。

天壇とは、道教思想によると、皇帝が冬至の日に都城の南の場所で天帝を奉祀した祭壇の事です。また、クリスマスも元々は冬至の日に神の復活を祈る祭りでした。

神々を太陽に例えると、冬至の日(神の力が一番弱まったとき)に神の復活を祈り、次に神の力が一番強くなる日(夏至の日)に太陽が昇るのが北東の場所です。

このように、この聖なるラインは、道教や原始キリスト

教の源流を考える上でも重要なラインであり、「死と復活」「輪廻転生」という宇宙の真理が内在されています。

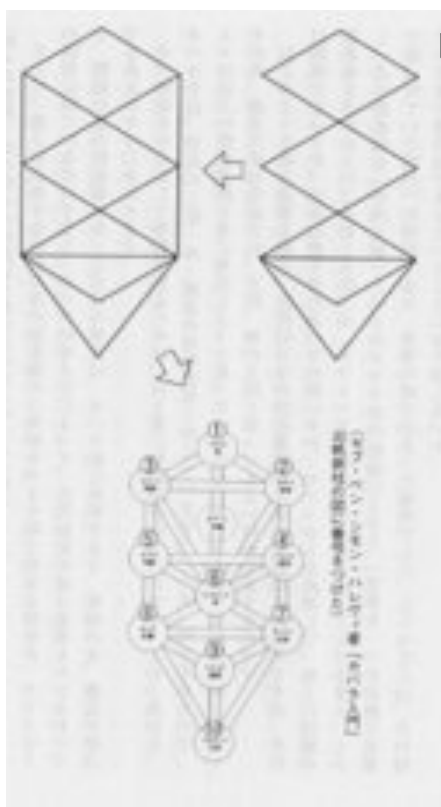
また、ダイヤ形は二つの三角形を組み合わせてできる図形で、一つのダイヤ形は二つの三角形になり、二つの三角形は一つのダイヤ形になります。

この事は、陰陽五行説の根本原理である「一つは二つ、二つは一つ」の意義を持つ図形と言う事になります。そこには、陰と陽、表と裏という宇宙の真理が内在されています。それは「般若心経」の有名な一節「色即是空、空即是色」にも通じる概念です。「色」すなわち形あるものは「空」、すなわち形ないものと表裏一体の関係であると言う意味です。つまり、形あるものは、形のない世界から創造されると解釈する事も出来ます。

さらに、古代祭祀のダイヤ形と大和三山が作る三角形を組み合わせる事で、ユダヤ教やキリスト教の源流にある「カバラ」の生命の木をシンボル化した図象「セフィ

ロト」が出来るのです。

図 3



セフィロトとは、神の領域から物質世界への「神的流出」によって生成される過程を示したのものであります。また、その創造現象を司る10種類の「神の属性」を示しています。神の神的流出を先に例えると、一番のケテル(冠)から光が流出され、各属性を経て10番目のマルクト(王国)に流出され、創造の作業は完成し、物質化するのです。この事を簡単に説明すると、たとえば、飛行機は

人が鳥を見て鳥のように空を飛びたいと言う思いが物質化して出来たものです。

飛行機が完成するまでには、目で見て、脳によってイメージし、いろいろな試行錯誤を繰り返す事が必要です。「生命の木」はその完成までの過程を10の属性に分けているわけです。この飛行機のように、人間が創造したものというものは、すべてイメージの世界、非物質的なものから発せられたものです。

そこで地上に点在する古代日本の祭祀場のダイヤ形三角形の図形がセフィロトの図形に似ているだけでなく、カバラの考えによって古代祭祀の成立過程もわかるのです。問題の北の祭祀場にあった古代の神宮は、カバラ的に解釈すると、原始の光、創造の原点でもあるケテル(図3)にあたります。その神宮を中心に季節を知るために西と東に祭祀場を造ったのです。この三角形をカバラでは、至高の三位一体、創造の神聖世界と呼んでいます。その後、村が出来たので、人々は山上の祭祀遺跡を里に再現しようと思ったのではないのでしょうか。それが大和三山です。その後創造作業は完成され、王国、神の王国と言ってもよい村が完成するので。

では何故、日本の古代祭祀と「カバラ」や原始キリスト教、道教とが関係しているかというと、世界の主だったルーツは、イワクラ祭祀に見られるような古代の日本の宗教がルーツになっていると私は考えています。(「甦った神々」をご参照ください)

それでは、三輪山について説明したいと思いますが、元三輪山が天壇だとすれば、それに対応する三輪山も天壇の性質をおびていると考えられ、北の祭祀場に対応して設けられたと思われま。また、三輪山山頂に元々あった日向神社が今は三輪山の麓で珍しく北面している理由もここにあるのではないのでしょうか。同様に元三輪山の巻向山は真向きの山で、やはり北の祭祀場を意識して名づけられたものと思われま。

崇神記によると御諸山(元三輪山)に登る夢によって天皇の即位者を決めたという記述があります。元三輪山と北の祭祀場を結ぶ縦のラインが神のラインで、元三

輪山と天神山を結ぶ横のラインが人のラインとするならば、元三輪山は神と人の交わる場所、つまり神人合一の場となり、皇位継承の儀式である大嘗祭の本義もここに

あるように思われます。
ところで、この元三輪山と大和三山との対応関係、とりわけダイヤ形や北東から南西への夏至、冬至の聖なるラインは、日本全国のイワクラだけでなく、世界中にあるイワクラや祭祀遺跡に共通する原理のような気がします。実際に、元三輪山や三輪山を中心とするダイヤ形はクロマンタ原理として全国の巨石祭祀遺跡に共通する原理として認知されつつあります。

私は日本のイワクラ、ひいては世界のイワクラや祭祀遺跡には共通の原理や一定の法則性があるように思っています。本学会の柳原輝明氏の発見された天体と相似形に配置されたイワクラもその一つだと思われま

す。
神話学者であり、歴史学者でもあったフロベニウスによると、月神信仰は日神信仰に先行していた

という事ですが、古代においては星を神とした信仰があり、天体相似形のイワクラは神の抛り代（よりしろ）としての性質があるといえます。

さらに、夜空にきらめく星々を神としてあがめていた古代人にとって地上に天体を配置すると言う事は、この世に神々の世界を写す事になるのではないのでしょうか。つまり、「人の世界」を「神の世界」のようにしたいという古代人の憧れが読みとれるのです。

道教では、崑崙と言う都についての説明があり、それは天上の崑崙山（神々の世界）にある天帝の下都、即ち地上の帝王の都を指します。天都、即ち「神々の王、天帝の都」への憧れは、「天都憧憬思想」と呼ばれ、秦の始皇帝や漢の武帝も帝王の都を天都と相似形にしようとした。それが都城制の基本原理となったのですが、それは帝王の都、即ち人の王の都、天帝の都、即ち、神々の王の都を地上に再現しようとしたものだったのです。

つまり、天体相似形のイワクラは「神々の世界への憧憬」「神々の世界を地上に再現する」「天を地に写す」といった古代人の宗教観をあらわしているのです。

また、本学会の小林由来氏を始めとする金山巨石群調査研究会によってイワクラと太陽の運行との関係、「暦」としての性質も確認されました。この様に、日本のイワクラに秘められている原理原則、さらには、日本各地に点在するイワクラとの位置関係における法則性を解明することが世界のイワクラや祭祀遺跡を解明する上での鍵になるものと私は考えます。

「神々の指紋」の著者、グラハム・ハンコック氏は、世界中の神話の中に共通する重要な数字、72を発見されましたが、この72と世界の祭祀遺跡とも関係していると言います。

例えば、エジプトのギザのピラミッドとカンボジアのアンコールの寺院は経度で72度離れていて、イースター島はアンコールから7

2の倍数の144度進んだ地点に最も近い陸地です。そして「これら多くの石を使用した建造物は計画的に造られたのではないか」という仮説を提示されていますが、もし彼の仮説が正しければ、世界中のイワクラや古代の祭祀遺跡と元三輪山を中心とする縦と横のラインが関係している、あえて言わせていただければ、その中心軸になっているような気がしてなりません。

その理由は、木の碑の伝承とその場所へご案内くださった野崎先生の存在、さらに、「竹内文書」やペトログラフィ学の研究成果から「世界が一つの宗教と言葉で結ばれていた時代」の世界政府が元三輪山の北の祭祀場（木の碑が建てられていた場所）にあったということに確信を持っているからです。そうであるならば、その時代の遺物と思われる日本のイワクラは世界のイワクラや祭祀遺跡の雛形であり、グラハム氏言うようにイワクラや祭祀遺跡が計画的に造られたとすれば、その中心は元三輪

山の北の祭祀場となるはずで

以上のことは学問的な根拠のない私見に過ぎません。しかし、イワクラ(磐座)学会の今後の研究によつてその事が学問的に認知されるものと期待しています。そして、古代の真実の姿を世界に発信し、地球における日本の霊的磁場の重要性とそこに住む我々日本人の役割を自覚する 때가 来ている様に思います。それは、渡辺会長がおっしゃる世界平和へ貢献する為の一つの方法になるかも知れません。イワクラとは、文明の進化の過程をたどってきた最高の文明人だと思つている現代人よりも、さらに高次の「失われた文明」の遺物なのかも知れません。彼ら古代人は、夏至、冬至ラインが示すように、渡辺会長がおっしゃる「文明の輪廻転生」を熟知していたかも知れず、我々は決しておごることなく、謙虚に彼ら古代人の英知に耳を傾ける事が大切だと思われま

せん。くために用意されたのかも知れ

イワクラ学会会報

一言コラム

三輪山にある大神神社では、毎年7月31日に茅の輪くぐりの神事が行われます。古歌を唱えながら、茅の輪を三回くぐるこの神事では、参拝者が境内の鳥居に取り付けられた茅の輪をくぐり、この半年間に身に付いた罪・穢を人形に移し、夏の無病息災、延命長寿を祈ります。

この茅の輪くぐりの神事には次のような由来があります。

神代の昔、武塔神が海王の娘を嫁に迎へに行くときに宿を借りることになりました。そこには蘇民将来と巨旦将来という兄弟の家があり、巨旦将来は富者であつたが宿を断り、蘇民将来は貧者でしたが喜んで宿を提供しました。武塔神は大層喜び、翌日蘇民将来に軒先に茅の輪を掛けるように言い残して出発しました。武塔神が発して間もなく、天下に悪疫が流行し、大勢の人々が亡くなりましたが、蘇民将来の家のみは何事も無く無事でした。

これ以来、人々は悪疫の流行する時には「蘇民将来の子孫」と称するために、茅の輪を家に掛け、災難を免れるようになったと伝えられます。

この茅の輪くぐりの神事は、祭神をスサノヲノミコト(素戔嗚尊)とする京都の八坂神社でも、大神神社と同日の7月31日に行われます。大神神社の祭神はスサノヲノミコト(素戔嗚尊)の六世の孫、大国主命の和魂である大物主神であり、両者の関連を伺わせます。